

新島賞 『「隣人愛」—わたしにできること—』 高尾 健翔

幕末、個人の海外渡航が死罪に問われる国禁とされていた時代に、21歳の新島襄は、自由を求め密航し、アメリカへ渡った。自分の命を厭わず海外へ飛び出した襄の情熱には驚かされる。日本にとって必要なのは、「技術や知識だけではなくキリスト教の精神である」と説いた彼の言葉が今の私の心に鳴り響く。

私は、今、盲導犬のパピーウォーカーとして、将来、盲導犬の候補となる子犬を預かり育てている。1頭の盲導犬を育てるお金の約10%は国や行政からの補助金で、残りの約90%は多くの善意による寄付や募金から成り立っている。フードや病院代などは、いずれもこれらの善意に支えられている。また、盲導犬の一生は、ブリーディングウォーカーと呼ばれる盲導犬候補を産む繁殖犬ボランティアから始まり、生後2か月から1歳になるまでを一般の家庭で家族として迎え入れ、様々な経験を共に過ごすパピーウォーカーが担当する。その後、約半年から1年、盲導犬協会と訓練士とともにトレーニングを重ね、人と一緒にいることが好きな犬、人と一緒に目標に向かって過ごすことに喜びを感じられる犬など適した犬が盲導犬としての生活をスタートさせる。盲導犬になるのは約2割と言われる。かなり少ない割合だが犬も人と同じ感情を持つ生物。盲導犬になることを強いるわけではない。盲導犬以外にも、次の候補となる子犬を産み育てる繁殖犬・普及のための募金活動やデモンストレーションを行うPR犬・一般の家庭で過ごす家庭犬などと訓練士が個々の適正を見極め、子犬の幸せを一番に願い将来を真剣に選択してくれるのだ。

盲導犬になった犬は約8年から10年、目が見えない・見えにくい方の「人生のパートナー」として目の代わりとなり歩行を誘導し、人は犬の日常の世話をしながら、「共に助け合う」生活を過ごす。引退した後は、パピーウォーカーの元に戻ることもあれば、余生を一緒に過ごすボランティアと新たな生活を送る。こうして1頭の小さな命はたくさんの人の善意と愛情、情熱によって支えられ繋がっている。この営みこそが、視覚困難な方の自立した社会参加と犬の幸せを願う「志」を持った「同志」の集まりなのだ。

犬は信号の色が見えない。信号を渡る際にはユーザーが車の音を聞き合図を出す。例えユーザーが指示を出しても、犬が危険と感じたら合図には服従しない。これが盲導犬の姿なのだ。全ての信号機に音響があるわけではない。あったとしても右左折車など多くの危険が潜んでいる。私は人と盲導犬とが安全に暮らせるシステムを構築するために、電子・情報工学を学びたい。日常に目を向け、あらゆる立場の人のことを知り、自分事として解決する手段を考えたい。私は盲導犬パピーウォーカーとして過ごす中で、襄が日本に求めた願いを垣間見たような気がした。私はこの経験を活かし、社会に貢献できる一人になりたい。キリスト教の精神を学び、隣人を愛する心を持ち続けようと思う。